

Title	W・スターク著 杉山忠平訳 知識社会学：思想史の方法
Sub Title	Werner Stark; The sociology of knowledge, translated by Ch. Sugiyama
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.3 (1961. 3) ,p.220(62)- 224(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19610301-0062
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610301-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

W・スターク著
杉山忠平訳

『知識社会学——思想史の方法——』

正直に言って、社会学という学問を考えた場合、われわれはそこに経済学、法学、文学というようなものが、混沌といり交ったような漠然たる印象を抱かない者があろうか。その対象が何であるかについて、経済学や法学のように、はっきりした物を見出しがたいようなはかゆさを感じない者は少ないであろう。ひとつには、社会学の成立が、比較的新しい時期にはじまったため、社会科学としての地位を獲ちえて間もないということもあろうけれども、その大きな原因の他のひとつには、ほかならぬ社会学者の側に、自分の研究領域というものにはっきりした認識——いいかえれば問題意識や方法論——をもっていないということ、そして仮にもっていたとしても、社会学そのものを一層深め、その内容をより豊かなものにしようとする努力が足りなかったという点にあるのではなからうか。「社会学」といった場合に感じられるあの何ともいぬ空疎な響き、このような感想は筆者の偏見かもしれないが、ともかくわたくしは、社会学というものに、いままであまり関心をもちなかつたしまたそれほど重要な学問だとは考えなかつた。法学や経済学のとから出てきたくせに、これらの領域を侵害する不遜な学問だらう

た業績をのこし、本書の訳者杉山氏の訳業として最近出版された「経済学の哲学的基礎」などは、彼の深い学殖のほどを示す力作である。そしてつい最近ではまた「知識社会学の先駆者、モンテスキュー」を出し、注目をあびている。

哲学的素養に乏しい筆者にとって、この書を批判することは、到底その任ではないので、ただ本書を読んで理解しえた筆者なりの感想を書きつづることによって、わずかに責を果させていただくことを、おことわりしなければならぬ。

本書は、第一章 目的の設定、第二章 知識社会学の先行者、第三章 知識社会学の本質、第四章 知識社会学の結果の四章から成っている。この訳書は、訳者ものべておられるように、「知識社会学——思想史のより深い理解のためのひとつの随想」(The Sociology of Knowledge: An Essay in Aid of a deeper Understanding of the History of Ideas, 1938, London)の第一部をなすものであり、知識社会学にかんする原則論的な部分にあたるものである。

本書を読んで最初に感じられた印象は、何よりも著者の哲学的教養の深さであり、その上に立って、社会的実在と人間の観念との関係を論じ、人間の知識が、いかにして獲得されるか、つまり人間による知識の生産活動がどのようにして成立するのかを素朴な唯物論によるのではなく、そうかといって公式的な観念論の立場に立つことを拒否しつつ、非常に説得力のある言葉で語り、読者を納得せし

書 評

にしか考えなかつたことは、わたくしの無智を証拠づけるものとして告白しなければならぬ。

しかしこのような偏見は、実に、スタークの「知識社会学」を読むことによって、ふきとんでしまったばかりか、知識社会学という新しい科学、いやむしろスタークというすぐれた社会学者の、実に豊かな感受性、精密な思考方法、みずみずしいばかりの思想的創造力に魅せられてしまった。彼は社会学や思想史研究者というよりは、むしろ思想家といった方が当てよう。それほど独創的なのである。一度読んで、さらに二度読みたくなる本こそ、真に良書というに値するであろうことを、ゲーテが誰かがいっているが、本書は、その内容の難解さにもかかわらず、いや、その内容のはかり知れぬ深さの故に、読み終ってしま一度読み返したい衝動に読者をかりたてる。

「訳者あとがき」にも記されているように、ウェルナー・スタークは、当時オーストリア領のチェッコスロヴァキアのマリエンバートで生まれ、ブラハ、ハンブルクでそれぞれ法学、政治学のドクターを、エディンバラでマスター・オブ・アーツの学位をとった。一九三七年—三九年プラハ大学の講師をつとめ、一九三九年、ヒットラーによる祖国侵略を契機としてイギリスに亡命、四一年ケンブリッジ大学講師、四五年エディンバラ大学の講師となり、五一年以降マンチェスター大学のリーダー(Reader)となり、今日に至っている。すでに社会思想史・経済思想史の研究者として幾多のすぐれ

めずにはおかない。

われわれは、社会科学に志す者として、本を読む場合に、まず著者がどのような立場に立っているか——たとえば、マルクス主義的な世界観か観念論かというように——を知ろうとするのが常である。筆者もはじめこうした態度で本書を読みはじめたのであったが、読むにつれてこのようなあらかじめ決められた先入的な観念をもって接することは間違ひであることがわかつた。著者は第一章において、人間の知的な発展や芸術的創造は、歴史的社会的な環境の変化と密接な関係があることを、著者得意の音楽の領域において試み、たとえばバッハとハイドンおよびベートーヴェンとの作風における差異は、フランス革命という政治的社会的変革の影響が、あとのふたり、とくにベートーヴェンに刻みこまれていることを、つぎのように指摘しているのは興味深い。

「ナポレオン時代の諸発展は、革命的時期のくるしみが、ヨリよき世界のうみのなやみではなかつたということ、誕生したものは、それが駆逐した封建主義とおなじく邪悪でいとわしい怪物であるということ、をますますあきらかにした。この事実のながにがしい実感がベートーヴェンの心と個性とをすみずみにいたるまでみわたしたのである。かれの芸術作品に純粹に個人主義的ならぬかたで接するのでは、かれの音楽のすべての意味はけっしてあきらかにならないであろう……。われわれは、『エロイカ』だけでなく、かれの全芸術を、フランス革命とその余波とを背景においてなが

めなければならぬ。そしてそうするときにはじめてわれわれはかれの芸術のふかみにはいることができるであろう。このようにして、音楽の内容ですら同時代の社会的実在におけるその底土と決定的にむすびついているのであり、またそれによって理解できるのである」(傍点筆者、本書、一七一―一七八頁)。

多くの示唆にとむ例証をかかげたのも、著者は、つぎのように結論づける。

「このように、社会的下部構造と文化的上部構造とは、たんに外面的・偶然的なものにとどまらないきずなによってむすばれた統一であるという確信は、思想と学問的考察とのすべてにきわめてひろくゆきわたっている……。だがこの結びつきが正確にはなんであるのかということになると、かれらはそれを知っていない。いやかれらはそう設問するだけの関心をもっていないようにさえおもわれる」(二四―二五頁)。

以上のようにのべることによって著者は、知識社会学という学問が、社会的実在と知的文化的な価値の創造との間にどのような関係があるのか、その関係を漠然とした形としてではなく、正確により具体的に把握しようとするものであることをつぎのように指摘する。

「その最終目標は、学説と方法との双方である。いいかえれば、社会的下部構造と知的上部構造との相互関係はどういうものであるのか、それは密接なものかそれともゆるやかなものなのか、一

やしくも階級的・党派的利害、利己的な関心が主要な役割をしめているところの観念であるとすれば、知識社会学は、なぜそのようなイデオロギーが形づくられたのかということ、いいかえればそのイデオロギーが発生する基盤となっている社会的実在とイデオロギーとの関係、つまり、なぜある一定のイデオロギーが、そのような形として発生するのかという、より根本的な哲学的な問題をとりあつかうのだというのである。

ここでわれわれは、著者がイデオロギー的歪曲について、面白いことをのべているので紹介しておこう。スタークは、アダム・スミスの経済学説——労働価値説——について「職人だけの活動しかない市場では、資本財は労働をはなれて無たということである。このようにして労働価値説およびその他のおおくのものは、要するに、古典経済学者たちが、それをもってしごととしたところのイメージに反映した社会秩序——小生産者の、農民ないし自営農と職人の社会——にふくまれた意味であり、またそこからの論理的演繹である」(二一五―二一六頁)とし、従って、「アダム・スミスのヴィジョンはイデオロギー的にゆがめられてはいなかった。その欠陥は、観察と希望像とを融合させたことではなく、冷徹さに比較して期待あまりにもひろいわけまをゆるしたことであった」とのべて、スミスは「どんな利害関心よりもむしろ真理に奉仕し、その意識下のな心も有毒物をほとんどたないような」ひとびとのひとりであることを強調している。

方的なものかそれとも交互的なものなのか、等々を正確にしめすような学説ないし理論と、ある具体的な精神的構築物ないし芸術的達成の社会的——「実存的」——根源をあきらかにし、それによってその構成と意味、その本質と存立とについて、他の方法でやっただけに理解したであろう、あるいはしえたであろうよりも、ヨリおおきな理解に達することを可能にするような方法ないし手づき様式との双方である」(二七頁)。

ここまで見てわれわれは、知識社会学が、どのようなものとして著者によって把握されているかを理解できるし、すぐれて弁証法的な叙述にうたれるのであるが、第二章知識社会学の先行者に至って、われわれは、思想史家としてのスタークの独創的な発想方法と精密な分析および絢爛たる文章にうたれる。とくにイデオロギー論と知識社会学の相違を論じているあたりは、彼の思想の深さを遺憾なく示している。すなわち彼は、「イデオロギー的思想とは、最初から、汚染されたもの、かげをおびたもの、克服され、われわれの心から駆逐されるべきものである」(八六頁)として、イデオロギー論と知識社会学との決定的相違について、「前者はそれ本来の径路からほうり出された思考様式をあつかい、後者は、すべての思考様式を、またとくに、われわれの世界観全体の知的くみたてをかたちづくり、しかもみちをあやまたせる、利害関心にとらわれた傾向がはたらくはるか以前に存在している思考様式をとりあつかう」(八七―八八頁)と論じている。すなわち彼は、イデオロギーというものが、い

実はこの点が筆者にとってひとつの疑問なのだが、スミスがなぜそうでありえたのか。著者は、スミスをもって、その労働価値説をもって、農民と職人の社会であった当時の社会を忠実に反映したものであり、党派的偏見や階級的利益に彩られている点があるとすれば、それはむしろ希望という一般的な人間の資質によってひきおこされたものであることを力説しているが(二一六頁)、これは著者自身が、スミスについてあらかじめ、ひとつの「理想型」を心に描いているように感じられるのは、果して筆者の偏見だろうか。なぜならスミスの「国富論」(正しくは「諸国民の富の性質と原因とにかんする研究」)の背景は、いわゆる「産業革命の前夜」、マニユファクチュアが支配的な生産形態となりつつあった時代である。従ってそこにはまだ、小手工業者、小農民などがかなり広汎に存在したことは事実であろうが、同時に産業資本家が、封建的土地所有者に抵抗する勢力として歴史の舞台に登場しつつあったことは、イギリス産業革命史の訓えるところである。だとすれば、ひとり「小生産者、農民ないし自営農と職人の社会」だけがスミスのヴィジョンに反映し、これを形づくるのに役立ったとするのはおかしくはないだろうか。労働価値説についてはそのような評価が正しいとしても、重商主義政策の批判にみられる経済的自由主義というイデオロギーは、やはりスミスの思想の根幹をなすものであり、たとえそれが著者のいうような利己的ないし党派的利害関心の合理化に起因しないとしても、やはり小農民や小手工業者の勢力を退けて勃興するブルジョ

ア階級の社会が色濃く彼の思想に投影した結果である以上、アダム・スミスがとくに「イデオロギー的にゆがめられていない」とするには論証が稀薄ではなからうか。

以上において筆者は、この野心的な労作のなかで、理解しえた限りにおいて著者のいわんとするところを紹介し、筆者の考えものべてみた。哲学的知識に乏しい筆者にとっては、第三章および第四章は非常に難解で、従ってほとんどふれずにこの拙ない書評を終らなければならぬことは、その非才の致すところとして読者諸子にお詫びしなければならぬ。杉山助教授の邦訳は、さすがに著者の指導をうけられただけに、訳業も綿密で、非常に読み易く、このすぐれた労作を完全に把握されている自信のほどが、行間に漲っている名訳であると思う。心から敬意を表する次第である。ただ筆者が気づいたことで、ひとつ指摘させていただくならば、ときどき句点のない長い文章がつづくことがある。あまり句読点が多いのも困るが、やはり、「は」とか「が」の助詞で主部がされる場合は、かりにその主部がどんなに短かくとも、そこで句点をつけることが望ましいと思う。そうでないと述部が長かった場合に、読んでいて意味がとりにくくなることも少なくない。たとえば、一二四頁の二行目からはじまり六行目で終る一節がそれで、いままじ句点があったほうが読み易くなるのではないかと思う。

しかしこれは些細なこと、むしろこのすぐれた著作を、著者が日本版の序文にのべているように杉山氏の訳業によって、われわれ

表的な著作を、杉山忠平氏の綿密な翻訳を得たのを機会に、再び取り上げることも無意味ではなからう。

W・スタークは、この書において、近代経済思想の背後にある社会哲学、すなわち、政治経済学という科学がそこから始まり、そこへ帰っていくような一群の社会理念、理想を対象としている。従って、これは経済分析の歴史ではなく、その背後にあってこれを規制する思想の歴史であり、これを彼は、経済学がそれを通して発展した決定的な段階の一つ一つを、それぞれ取り扱った三つの論文において素描している。そして彼は、そこに示した三対の思想家が、いわばそれぞれの段階の信条を要約すると考えた。すなわち、

古典経済学の哲学的基礎

一、大反定立||自然と人間(J・ロック)

二、大総合||神的秩序(G・W・ライプニッツ)

古典経済学の終末、岐路に立つ自由主義と社会主義

一、自由主義のみち||トマス・ホジスキ

二、平等主義のみち||ウィリアム・トムソン

近代経済学の科学的基礎

一、古い社会哲学の消滅

二、古い社会理想の解体 (R・ジェニングズ)

このような構成を取った理由は、ロックとライプニッツは古典経済学の哲学者であり、ゴッセンとジェニングズは近代理論の先駆者であり、トムソン及びホジスキンの思想において、古典経済学から

書評

が読むことができるのはまことに幸というべきである。本書を読むことによって、ひとは経済思想史への新しい眼が開かれることと思ふ。(ミネルツァ書房、一九六〇・五・二〇・四七〇円)

——一九六一・一・一一—— (飯田 豊)

W・スターク著
杉山忠平訳

『経済学の哲学的基礎』

(W. Stark; The Ideal Foundations of Economic Thought, Three Essays on the Philosophy of Economics.)

—

K. Mannheim 編集による International Library of Sociology and Social Reconstruction の一冊として、この書が出版されたのは、一九四三年のことであって、三田学会雑誌上にはすでに服部成三郎氏による紹介(四五卷一二号)があり、私も何度かこの書に触れたことがある。だが著者スタークは、近年ベンサム、サン・シモン、モンテスキューなどについての労作をつぎつぎと発表し、知識社会学についての興味ある著書を発表するなど、まことに注目にあたいる研究活動を進めているので、四版を重ねたこの代

近代理論へとみちびいた大きな危機が、最も明瞭に表現されている(Preface)と著者が考えたからであろう。彼の意図は、古典経済学から近代理論への移行行きを哲学的に検討すること、すなわち現実主義的であると同時に理想主義的でもある学説から純粹に現実主義的な理論への経済学の発展は、得たものと共に失ったものが、進化と共に退化が、豊富化と共に貧窮化であったことを示唆することにある。真理の探究を善の探究から切り離すべきではない、人間的な思索という偉大な使命は、この両方の仕事成しとげられる時初めて果される(Postscript)という言葉は、彼の立場をわれわれに示す。それはまさに“Cambridge spirit of economics”——社会哲学と経済分析との間には決して断ち切れない堅いつながりがあるというマーシャル的信念——以上でも以下でもない。すなわちそれは、最近の経済学の純粹に技術的な傾向に対する一つの批判ではあるが、このような傾向を全面的に克服するような別の立場からするものではなく、近代経済学の内部において、失われた価値を求めて理想主義と実証主義を折衷するという意味において。

二

スタークは、古典経済学は中世解体後の新しい宇宙論の不可欠な一部であり、ケネーとスミスは、ロックとライプニッツに多くのものを負っていると考える。そしてロックの思想の中あらゆる通路は、人間は直接自然の前に立ち、自由に自然に接近できねばならない